

語彙統語論的なヴォイス対立と形態論的なヴォイス対立 —漢語動名詞「影響」を中心に— 王丹彤

現代日本語のヴォイスの表現手段は、「能動－受動」という形態論的なヴォイス対立が一般的であるが、村木(1991)『日本語動詞の諸相』(ひつじ書房)では、ヴォイスの語彙統語論的な表現手段として、機能動詞「あたえる」「うける」を挙げている。しかし、従来の日本語のヴォイスの研究では、こうした語彙統語論的な表現手段を対象とした考察が十分に行われておらず、ヴォイスとしての性質や位置づけも明らかになっていない。本発表では、語彙統語論的なヴォイスへのアプローチの第一歩として、代表的な語結合を取り上げ、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の用例調査にもとづく考察を行う。機能動詞「あたえる」「うける」と結合し、語彙統語論的なヴォイスとして機能することのできる漢語動名詞を分類語彙表に求めれば、「関係/類/因果」「活動/待遇/救護・救援」「活動/交わり/賛否」「活動/待遇/命令・制約・服従」の項目にほぼ集中する。今回は、この中から、「関係/類/因果」に属し、最も用例の多い「影響」を取り上げる。形態論的なヴォイスとの比較を行うので、具体的な対象は「影響する」「影響される」「影響を与える」「影響を受ける」である。

影響の与え手 X・受け手 Y を表す名詞のクラス(人名詞か物事名詞か)に着目して、収集した用例の分布を調べると、「X が Y に影響する－Y が X に影響される」といった形態論的なヴォイス対立が成立するためには、①X が物事を表す名詞である、②Y が具体的な人名詞ではない、という二つの条件を満たす必要があることが分かった。一方、「X が Y に影響を与える－Y が X に(から)影響を受ける」には、そうした条件は必要がなく、全面的にヴォイス対立が成立している。したがって、これらの条件を満たさないケースでは、「影響をあたえる」「影響をうける」を使用する必要がある。結論として、文法形式としては基本的であると考えられる形態論的なヴォイスで表現できない部分を語彙統語論的な表現手段が補完しているという事実が確認されたことになる。